
そこから引っ張り出せたら

みどり風香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そこから引つ張り出せたら

【Nコード】

N2964U

【作者名】

みどり風香

【あらすじ】

師匠・芭蕉と旅をしていくうちに、曾良は師匠が何かしらを抱えていることに、ぼんやりと気づく。もしかしたら、置いて行かれるのかも？ いつか、いなくなってしまうのかも？ 曾良が悩みます。

(前書き)

このお話は、増田こうすけ作『ギャグマンガ日和』の二次創作です。以前投稿した「底なし沼から引つ張り出して」の曾良君視点のお話となっております。原作の雰囲気^が皆無ですので、閲覧の際はご注意ください。

僕の師匠は、俳聖とうたわれた者。彼の生み出す俳句は、きつと後世に語り継がれることだろうと、勝手に予想してみた。彼は、きつと俳句の神様に愛されて生まれたんだろう。……まともな俳句よりふざけた俳句のほうが多いけど。

僕が師匠と呼ぶ人をたたくのは、まじめに俳句を詠ってほしいから。ただそれだけだ。憎くて断罪するわけではない。だからと言って、好きだから愛情の裏返しでしばくわけでもない。断じてない。

ただ、気になることがひとつ。師匠の様子が変だ。もともと変人なのは知っているが、これはその変とはまた違う。

「芭蕉さん？」

「ん？」

師匠、松尾芭蕉の顔をうかがってみた。体調不良というわけではないけど、絶好調というわけでもなさそうだ。これ以上は僕が耐えられない。

「ぐつはあ！」

心配していると思わせたくない。断罪だ。

「何を浮かない顔をしているんですか。気持ち悪い」

本当は、そんなこと少しも思っていない。自分の意地っ張りに呆れてくる。

「浮かない顔してただけで罪深いの!？」

「ほかの人ならそれほど気にも留めないんですが、芭蕉さんだと無性に腹立たしくなって」

そうだ。僕の許可もなく勝手に沈んで、僕をいらいらさせるとはいい度胸だ。

「要するにただのやつあたりじゃないか! ひどいよ曾良君!」

これは芭蕉さんの言うとおりの、やつあたりだ。僕もちゃんと自

覚している。

「芭蕉さんが悪いんです」

「この鬼弟子ー!!!」

これ以上会話して墓穴を掘りたくはない。僕は大胆でさっさと歩いていく。

「……本当に、心配なんですから」

「うん？ 何か言った、曾良君？」

「何も」

距離は離れていたから、きっと僕の本音なんて聞こえちゃいないだろう。それでいいのだ。僕は傘をかぶりなおす。

「次の宿はもうすぐかな」

「ええ。もう目と鼻の先です」

「わーい。もうくたくただよ、早く行こう、曾良君」

「あんまりはしゃぐと断罪しますよ」

「はしゃいだだけで有罪!？」

「ほかの人なら何とも思いませんが、芭蕉さん相手だとつるさく感じてしまうので」

「曾良君の鬼ー!!!」

こうして、喧嘩のような漫才のような会話をしながら、僕と芭蕉さんは宿に着いた。

宿で簡素な食事をし、風呂もすませてあとはのんびりするだけになって、芭蕉さんが月見しながら酒に誘ってきた。きれいなものは好きだから、僕はそれに乗じた。

「月がきれいだねえ」

深い意味があるのかないのか。知らないふりをして「そうですね」とつぶやくだけだ。

「こういつさ、美しいものを目の当たりにすると、なんだか自分のいやなことか忘れられる気がするよ」

「……芭蕉さん？」

普段なら、芭蕉さんにいやじゃないところなんてあるんですか、と茶化すか罵倒するところだ。だけど、それを心が拒んだ。

芭蕉さんの、様子がおかしい。月を眺めながら、同時に遠いどこかを思い出しているような、とにかくいつもの芭蕉さんじゃないのは確かだった。

「芭蕉さん？ 酔ってしまいましたか」

酔ってるわけではないことくらい、この弟子はお見通しなわけですが。

「え。あ、うん。ちょっとね。残りは曾良君が飲んじゃって」

そういつて瓶を渡す。仕方がないから受け取る。残りの酒を飲みほした。

なんだこれ？ 頭がぐらぐらする。さっきまで結構飲んでいたのに、いまさら酔いが回ってくるとは思えない。盛られたか？

しかも、強烈な眠気が襲ってくる。盃を落として、それを拾って片づける余裕も僕には残されていない。

あなたのしわざか。

「どうしたの、曾良君？」

「ねむいです……」

「布団敷いてあるから、寝ちゃいなさい。片付けは私がしとくよ」

「翌朝気分が悪かったら、芭蕉さんめがけてリバーします」

「リバーせんといて！」

僕は重たい体を引きずりながら布団に倒れこむ。着物がはだけて、布団もまともに体にかかっていない状態だ。普段の僕ならこんな失態を師匠の前でさらすことなどないのに。盛られた薬は、それほど強力のようなだ。

瞼が重たい。体が熱い。吹き抜けていく風が涼しい。このまま酒の心地よさにおぼれてしまえばこれほど楽なことはない。でも、このまま眠りに落ちてしまったら、僕を見下ろしている師匠はどこへいくのだろう？ 奇妙な直観だが、もしかしたら芭蕉さんが帰ってこない気がした。だるい手を必死に動かして、芭蕉さんの袖をつ

かもうとするが、力が入らず結局願いかなわずとんと手が落ちて終わった。

「お休み、曾良君」

結局、僕はそのまま眠ってしまった。

あの人は、どこへ行ってしまっただろう。僕の知らないところで、芭蕉さんは苦しい思いをしている、気がする。本人に聞いたことはないし、教えてもらったこともない。問い詰めることもしない僕は臆病なのだろう。

ふっと目が覚める。完全に覚醒してはいないが、夢から現実に帰ってきたことは確認できる。

「ん……」

「あ、起こしちゃった？」

芭蕉さんが、帰っていた。それだけで、なんだか安心する。よかった。この人は、どこにもいかない。僕に内緒で、消えたりはしない。

「まだ寝てなさい」

そつと、額に芭蕉さんの手が置かれる。もう置いてけぼりになるもんか、と僕はその手をつかんだ。寝ぼけてない。素でやっている。

「う、ん。芭蕉、さん」

「芭蕉さんはここにいるよ」

「……芭蕉さん」

「はいはい」

僕の呼びかけに、答えてくれる。この人は幻じゃない。もう離すものか。両手でがっちりつかむ。絶対に、僕を一人にしないでください。あなたが拒むなら、何も追求しません。打ち明けられても、決してあなたを拒んだりしません。

あなたがどんな泥沼に引きずり込まれても、僕がその着物を、髪を、首を、足を、どこでもひつつかんで引つ張り出しますから。

だから、僕が飽きるまでずっと一緒に旅をさせてください。

手を引き離されることはなく、芭蕉さんは畳にそのまま寝ころんだ。僕は珍しく良心を発揮して、自分の掛布団を半分かけた。そしてほどなくして、僕も再び眠りについた。

(後書き)

以前書いた「底なし沼から引っ張り出して」の曾良君 var です。
もし芭蕉さんが忍者だったとしても、曾良君はぎりぎりのところまで
しかわからず一番深いところまで探れないというむず痒い関係になれ
ばいいと思うよー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2964u/>

そこから引っ張り出せたら

2011年6月26日18時40分発行